

「私もバブルを経験してみたいです！」「バブルは泡やで。それでもええの？」——昼休みに漏れ聞こえてきた新卒社員と中堅社員の会話です。

あのバブル絶頂期の89年、20歳の誕生日に祖母から譲り受けた〇社の株式を売り、娘3歳のクリスマスにピアノを買いました。ポロンポロン♪と、小さな指が奏でる迷（？）演奏に、どれほど

株式投資の幸せ

浪花おふくろ投信代表取締役 石津 史子



東西冷戦の象徴・ベルリンの壁が崩壊して、この9日で20年になります。

心を癒やされたことでしょう。株がピアノに換わったことで、時間をかければ株式が人を幸せにすることもできるのだと、私たち夫婦は教えられたのでした。

この間に、いわゆる東側の諸国は続々と資本主義経済の仲間入りを果たし、さらには南米やアフリカでも、高い経済成長

を続ける国々が現れています。働けばモノやおカネが手に入り、生活水準も向上する、という幸せを実感していることだろうと想像します。どこかの国では、P社かQ社の株をおばあちゃんから譲り受けた孫が、夢だった品物に換えている、なんて光景もいざ見られるかもしれません。

翻って、我が国にとつてこの20年は、バブル崩壊からの長く困難な期間でもありました。経済的停滞から抜け出せず、国の借金は膨らみ、株価は

下がったまま。でも、株式への投資が幸せにつながる道はあるはず。思い浮かぶのは、伸び盛りの国にも投資することです。海外への株式投資は、その国の企業の成長を支えることであり、それが回り回って日本にもプラスに働く可能性があります。

豊かになっていくこれらの国で、孫たちが買うだろうピアノやテレビや自動車が高品質を誇るわが日本の製品だったら、どんなにすばらしいことでしょう。